

がん告知において看護師が抱く陰性感情に関する文献検討

○福田 沙季（加古川中央市民病院），堀 理江（関西福祉大学看護学部）

I. はじめに

がんの病名告知は近年一般的になってきている。がんの告知について、看護師は告知後の患者と接する時に胸苦しきや戸惑いを感じている（竹永ら,2012）。看護師が、がん告知に対し、胸苦しきや戸惑いなどの陰性感情を抱きながら患者・家族に関わることで、看護師自身の疲弊やストレス、看護ケアの質の低下に影響を及ぼすと考えられる。そこで本研究では、がんの病名告知において、看護師が抱く陰性感情を明らかにすることを目的とし、文献検討を行った。

II. 用語の定義：陰性感情とは、患者・家族との関わりの中で看護師に生じる葛藤や困難感、戸惑いなどの消極的な感情とした。

III. 研究方法

1. データ収集方法：医学中央雑誌 web 版を使用し、「がん告知」「告知」「バッドニュース」「悪い知らせ」「看護師」と「葛藤」「困難」「戸惑い」「ストレス」「思い」「負担」のキーワードを掛け合わせ、2011 年から 2021 年の会議録を除いた原著論文に限定した結果、128 件の文献を抽出した。そのうち、がんの病名告知や、未告知患者と関わる看護師が抱いている陰性感情が記載してある 9 件と、ハンドサーチによる 4 件の計 13 件を文献検討の対象とした。

2. 分析方法：文献を精読し、がんの病名告知において看護師が抱く陰性感情が記載されている文脈を抽出した。内容の類似性によりサブカテゴリーを作成し、類似性を有するサブカテゴリーからカテゴリーを抽出した。量的研究の分析方法は、結果を概観し、統計内容をまとめた。

IV. 結果

1. 量的研究の結果（6 件）：病名告知・未告知に関わらず、患者や家族に関わる看護師の半数以上が困難感や負担感といった陰性感情を抱いていることが明らかになった。

2. 質的研究の結果（7 件）：4 カテゴリーと 9 サブカテゴリーが生成された。【がん告知同席に伴う負担や苦痛】は、《患者・家族の人生を左右するような大事な場で、求められる役割や役目に精神的負担を感じる》《同席することの意義が見いだせない》《告知場面の人的環境に緊張したり苦痛を感じる》の 3 サブカテゴリーから、【告知後の患者・家族の対応に対する戸惑い】は、《自己の対応を評価できず不安を感じる》など 2 サブカテゴリーから、【未告知患者への関わりにおける困難感】は、《患者に真実を言えないことへの辛さや罪悪感がある》《患者に病名や予後を悟られる恐怖や、悟られることで患者の前向きな気持ちに影響を与えることへの戸惑い》の 2 サブカテゴリーから、【未告知が患者・家族にとって最善のことなのかという葛藤】は、《患者・家族と思いが異なることに対する葛藤》など 2 サブカテゴリーから構成されていた。

V. 考察

病名告知している場合、看護師は、告知後の患者・家族への関わり方が分からず、戸惑っていた。病名未告知である場合、看護師は、患者との関わりにおいて、嘘をつかなければならない状況や、患者の闘病意欲低下に繋がるのではないかという思いがあり、困難感に繋がっていた。

VI. 文献

竹永美歩,樽屋茉莉香,久保友紀穂,福森絢子.(2012).告知を受けたがん患者に対する看護師の精神的援助と看護師が抱くジレンマ.日本看護学会論文集:成人看護II,42号,252-255.